



Title	日本スキーの発祥前史についての文献的研究
Author(s)	中浦, 皓至; NAKAURA, Koji
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 84, 85-106
Issue Date	2001-12
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.84.85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28833
Type	departmental bulletin paper
File Information	84_P85-106.pdf



日本スキーの発祥前史についての文献的研究

中 浦 皓 至

A Historical Study of Some Aspects of Skiing in Japan before the Takada Introduction

Koji NAKAURA

目 次

はじめに	86
第一章 スキーの紹介	87
第一節 北蝦夷図説（文化6年）	87
第二節 少國民（明治29年）	87
第三節 偕行社記事（明治36年）	88
第二章 スキーの渡来	89
第一節 松川敏胤（明治28年）	89
第二節 ペーター・オッテセン（明治35年）	90
第三節 デルメラトクリッフ（明治39年）	91
第四節 ハンス・カラー（明治41-42年）	92
第五節 上原勇作第七師団長（明治42年）	93
第六節 杉村虎一瑞典公使のスキー（明治43年）	94
第三章 スキーの試乗	95
第一節 伝兵衛（元禄14年）	95
第二節 河合七郎（明治26年）	95
第三節 野村治三郎（明治37年）	95
第四節 ハンス・カラー（明治42年）	96
第五節 永井道明（明治43年）	96
第四章 スキー技術の習得	97
第一節 三瓶勝美（明治28年）	97
第二節 永井道明（明治40-41年）	98
第三節 北鎮小学校（明治43年）	98
第四節 鶴見宜信（明治43年）	101
おわりに	102

はじめに

日本における近代スキーは、テオドア・エドラー・フォン・レルヒ (Theodor Edler von Lerch; 1869～1945: 以下, レルヒ) が1911(明治44)年1月に高田で教えたスキーから始まった。ここで近代スキーとは、日本に古くから伝わるカンジキや、当時樺太やロシアから日本に持ち込まれていたカンジキ式スキー(当時の新聞には露式寒敷と報じられていたロシア式スキー)ではなく、ヨーロッパで使用されていた歩行用具から19世紀後半に進化したスキー(北欧式スキー)や同じ頃山岳で用いられるようになったスキー(アルペン式スキー)を指している^{註1)}。

日本における近代スキー発祥前の歴史(以下, 発祥前史)については、多くの先行研究がある。それらのうち主なものを発表された年代順に見ていくと、次のようになる。

- ① 遠藤吉三郎・木原均, スキーの歴史(最新スキー術, 1919),
- ② 小川玄一, 部の歴史として(記念創立拾五年, 1926),
- ③ 吉井修七, スキーの語源・起源並に我国スキーの沿革(丘陵スキー術, 1930),
- ④ 山崎紫峰, スキーの渡来(日本スキー発達史, 1936),
- ⑤ 小川勝次, スキーの渡来史(日本スキー発達史, 1956),
- ⑥ 中野理, スキー渡来(日本スキーの黎明, 1957),
- ⑦ 中野理, スキー渡来(日本スキーの誕生, 1964),
- ⑧ 福岡孝行, スキー誕生と文明開化(スキー発達史, 1971),
- ⑨ 大野精七, スキーの渡来(北海道のスキーと共に, 1971),
- ⑩ 瓜生卓造, 高田以前のスキー(スキー, Vol. 73-1, 1972),
- ⑪ 長岡忠一, スキーの渡来(日本近代スキーの発祥と展開, 1974),
- ⑫ 坂部護郎, スキー発達略史(はるかなるシュプール, 1976),
- ⑬ 長岡忠一, スキーの渡来(日本スキー事始め, 1989),

これらの先行研究に共通していることは、引用されたとみられるものが多いにもかかわらず、典拠がほとんど示されていないことである。さらに、ひとつの史実に諸説がみられるが、相互に検討された形跡もみられないなど、未整理のまま独自の立場で論述されているものが多いように見受けられる。

そこで本研究の目的は、第一に先に挙げた先行研究を比較し、一つの史実が異なって記述されている場合に引用の経過と相互の関連を推察しながら最終的な結論を導き出すこと、第二に筆者が発掘した史料によるスキー導入の事実を発祥前史につけ加えること、第三に「スキーの渡来」と表現されている従来の内容にはスキーの板だけ、スキーの絵だけ、スキー技術及び指導法など、さまざまなパターンが混在されているので、これらを四つの類型に分けて整理しながら概括することである。ここで四類型とは、1) スキーが紙上で紹介された、2) スキー板が輸入(持ち込ま)れた、3) スキーが試乗された、4) かなり乗りこなしてスキー技術が(それなりに)習得されたと思われるものである。これらを以下、1) スキーの紹介、2) スキーの渡来、3) スキーの試乗、4) スキー技術の習得の順に記述する。

第一章 スキーの紹介

第一節 北蝦夷図説（文化6年）

初めて日本にスキーが紹介されたのは、1809(文化6)年、間宮林蔵が樺太探検を行った後に著した『北蝦夷図説』¹⁾に掲載されたイラスト(図1)である。それは樺太アイヌが冬期間に歩行道具として用いていた「歩くスキー」でありストーと呼ばれていた露式寒敷である。

当時、樺太には二種類のカンジキがあったと樺太史を研究している杉村孝雄は指摘している。杉村によれば、現地のアイヌたちが古くから使っていたカンジキは「ヌソオフト」と「ストー」の二種類に分けられ、ヌソオフトとは、「犬橇(ヌソ)ニ使フスキーノ意義。前端反り、スキーノ幅広キ形ナリ。エゾマツ又ハトドマツヲ材トシタル橇ニシテ犬橇御者、橇ニ跨ガリ是ヲ履キ両手ニ舵棒ヲ把握シ滑走シナガラ操縦ス」²⁾るものである。次にストーについて杉村は、「形態材料等前者ト同一ニシテ滑走ヲ良好ナラシムル為、裏面ニアザラシノ毛皮ヲ毛順ニ張り、冬季外出ノトキスキーノ如ク使用ス」²⁾るといふ。さらに北大スキー部の六鹿一彦はもっと具体的に、次のように論じている。

ストーの最典型的のものは、長さ一米突半、幅約十五糎、厚さ約3/4糎で、両端はスキーの先端の如くに尖つて少しばかり上方に反つて居る木片から成り裏面には全面に海豹の皮を張りつけたものである³⁾。

ところでストーの日本への移入について氏家^{ひとし}等は、次のように述べている。

近代においては、サハリンアイヌの北海道移住などによって、スキーがもたらされた可能性が高いと考えられる。しかし、それ以前には、大陸との交流がなされていたにもかかわらず、スキーは日本に伝播しなかった⁴⁾

ヨーロッパから近代スキーが移入される前に、東北・北海道にストーが一台や二台は移入されたかも知れないが、広く普及したという事実がないことから、筆者もこれに賛成である。

第二節 少國民（明治29年）

次いで、1896(明治29)年、雑誌『少國民』に、次の記事とイラスト(図2)が掲載された。

「スキ」馳なるもの、近頃欧州北部地方に流行し初めたり。那威をよく知れる人は「スキ」の何物たるやを知らざるものなかるべきも、他國未だかゝるものあらざれば、皆これを聞く人信ずるもの稀なり。「スキ」とは和蘭の古画に木履を穿つを見るか如く、常時使用せる密着離るべからざる二瓣を有する一個のはきものなり。其「スキ」馳けなるものは長距離を飛び得たるものは勝を占むるものとす。而して其着地點には、勿論雪を積み置かざれば能はず⁵⁾

として、ノルウェー・スウェーデン王の下し賜いし優技者の徽章をつけたミッケル・ハムスベッド氏は102フィート[約31.11m]の大距離を飛んだことを紹介している。つまり、ここではジャ



(図1) 樺太原住民のストー

ンプスキーを「スキ」馳けと称しているのである。この文献が、雑誌『小國民』（明治29年4月発行）に掲載されていると最初に紹介したのは、1970年の伊黒正次である⁶⁾。

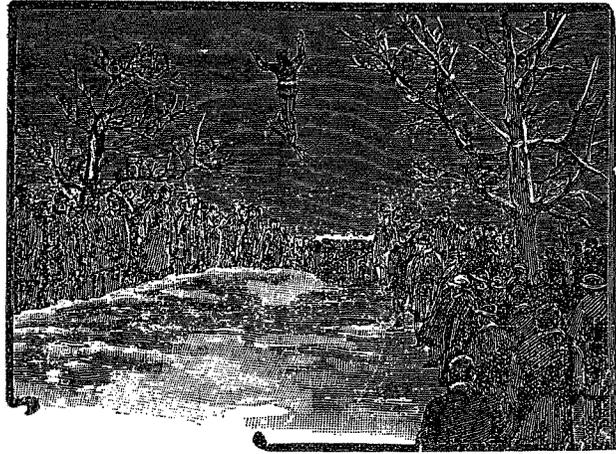
第三節 偕行社記事（明治36年）

歩兵第五連隊の八甲田山遭難事件の翌年、1903（明治36）年、神戸在住の瑞典^{スウェーデン}那威國総領事ピーター・オットセセンがノルウェー軍のスキーと説明書を取り寄せ、日本陸軍に寄贈した。歩兵中佐亀岡泰辰が、そのノルウェー軍のスキーを『偕行社記事』⁷⁾に『サイ』（図3）と題して紹介した。

時正に沍寒、北地に在ては風雪日に加わり、山川変じて平野となる。彼の歩兵第五連隊の遭難も実に此時期にありし、今や既に一星霜を経ると雖も、追憶転た哀悼の情の深さを覚う、然も我忠勇なる軍隊将士は、之が為にして反て

益々奪い、既往も禍害に鑑みて、鋭意研究其周密なる用意を以て、雪中行軍は又將に各地に行われんとす、軍國の為め裨益する所豈尠少ならんや。茲に客歲青森事件後に於いて、在神戸瑞典那威國総領事「ピーター・ラッテセン」氏が懇切の情を以て、其筋に差出されたる那國軍隊冬季雪中行軍の際使用する『サイ』なるもの、函を得たり、因て之を本誌に掲げて、寒地軍隊の参考に資せんと欲す、若し幸に実際に試用せられて、之が利害を極めらるゝを得ば、独り余が提出の本懐のみならざるなり。

この本文に続けてスキーの見取り図、スキーの締め具、スキーを履いて平地滑走をしている軍人のイラスト（図3）が掲載されている。亀岡は、八甲田山遭難事件の調査を担当したことからスキーの必要性を感じて偕行社の発行する雑誌に「寒地軍隊の参考に資せんと欲す、若し幸に実際に試用せられて、之が利害を極めらるゝを得ば、独り余が提出の本懐」と、軍隊にスキー使用を薦めている。



（図2）『少國民』の「スキ」馳け



（図3）『偕行社』の「サイ」

第二章 スキーの渡来

第一節 松川敏胤（明治 28 年）

日本に初めてスキーが持ち込まれたのは、1895（明治 28）年の「松川敏胤大尉が日清戦役の凱旋時に持参したスキーである」といわれている。この原典は、どうやら 1926（大正 15）年に北大スキー部の小川玄一が著した「歴史として」であると見られる。当時、北大スキー部主任であった小川が北大スキー史をまとめており、その冒頭部分に、「本邦にスキーの輸入されたのは明治二十八年日清戦役終をつげ、日本軍凱旋の際松川氏之を持参し」⁸⁾（以下、小川説）と記している。小川説は出典が示されていない。これについては、先に挙げたほとんどの先行研究に「日本へのスキー渡来第 1 号」として記述されているので、その系譜を少し詳しく論考する。

年代順にみると、最初に吉井修七（1930 年）が「松川某氏が…」と小川説を引き、その後山崎紫峰（1936 年）が引用している。ただ山崎は、単に小川説をそのまま引用したのではなく、小川説のウラをとるために札幌在住の三瓶勝美に依頼して調査してもらっている。その結果を次のように記した。

- 1) 小川は北大スキー部の 2 年先輩であった松川五郎（敏胤の息子）から聞いたこと、
- 2) そのことによって「松川敏胤」とファーストネームが判明したこと、
- 3) そのスキーは「満州」から持ってきたこと、
- 4) そのスキーは松川が金沢の旅団長になったことから、その後金沢偕行社に陳列されていたこと（それを知った山崎が、金沢師団に問い合わせたところ、すでに 40 年も過ぎていたからであろう「不明」との返事であった）、

これにより、小川説にある松川のスキーは、松川の息子・五郎から小川が直接聞いて記述したことが判明した。この時点で、小川は五郎の父・敏胤に確かめることができたのか、それとも五郎が父から聞いたという単なる口述伝なのか記述されておらず、いまとなっては確認する術がない。

そこで筆者は、三瓶調査の小川と松川の関係を確認するため二人の経歴を北大図書館に保存されている学籍名簿で調べてみた。その結果、小川は北大予科独語学級に入学し 1922 年に卒業、そのまま本科医学部に入学。医学部卒業後そのまま研究室に残り、1934 年助教授、1948 年教授になっていた。一方、松川五郎は小川より 2 年先輩で、1922（大正 11）年には北大スキー部の主任をつとめ、日本初の固定ジャンプ台・シルバーシャントツェを設計している。さらに、1923（大正 12）年 2 月 12 日には、松川がリーダーで小川も一緒に札幌岳に登山している⁹⁾。小川の回顧録『吹き寄せ』⁹⁾（1988）に松川のことを記述していないか調べてみたが見つからなかった。二人が、特に親しい間柄でなかったからかもしれない。しかし、学生時代に二人が同時期に北大スキー部で活動していた事実から、小川が「歴史として」をまとめる時に、先輩であった松川敏胤の息子・五郎から直接聞いたという三瓶の調査結果は、間違いのないと思われる。

このように小川説は、山崎によって補強された（以下、山崎説）。山崎説が後に、小川勝次、福岡孝行、坂部護郎、長岡忠一等に、いわば孫引きされたものと見られる。

次に、『スキーの黎明』（1957）と『スキーの誕生』（1964）を著した中野理は、北大スキー部の第五代部長を務めた大野精七に、この山崎説を直接確かめている。その結果を中野は「北大の西川教授によれば…」¹⁰⁾と（下線、筆者以下同じ）記している。筆者が調査した範囲では、当時の北大には西川教授は在籍した事実はない。中野は、おそらく「小川教授」を「西川教授」

と誤記したのではないかと思われる。さらに、次に見る大野の説によって「松川陸軍大将が一組のスキーを欧州から持ち帰った」¹⁰⁾と誤って著述している。

大野は『北海道のスキーと共に』に、典拠を示さず「松川陸軍大将がスカンジナビアから」¹¹⁾とスキーの持ち込み先を変更し、これを見た瓜生卓造は大野と山崎の両説を並記している¹²⁾。

以上の考察から、明治28年に松川敏胤によって日本に初めて持ち込まれたスキーは、現在のところ山崎説が最も真実に近いと思われ、満州のロシア式スキーであったと判断される。

第二節 ペーター・オッテセン（明治35年）

この件については、吉井が最も早く、「かの有名な青森歩兵第五連隊の八甲田山の遭難の悲報に依って諾威政府より青森連隊に二台贈って来たけれどもその使用法がわからないため研究しなかった」¹³⁾（以下、吉井説）と記述している。吉井説には、青森連隊がスキーを受けた日時が明示されていない。しかし現在のところ、明治35年にノルウェー政府からスキーが贈られてきた、が定説のようになっている。このことを少し考察してみたい。

吉井説を見た山崎は、同連隊に事実を直接問い合わせたが何も手がかりを得ることができなかった。そこで吉井説を諦め『秋田縣のスキー年表』の「同 [明治] 卅五年、彼の青森連隊八甲田山雪中大遭難に同情して、諾威政府より同四十二年に、同連隊へ贈って来た」¹⁴⁾によって日時を「四十二年」と変更した。小川勝次は典拠も年月も示さずに、

この大遭難事件の報を耳にされたノルウェー皇帝（一説にはスエーデン皇帝）が「日本にはまだスキーは使用されていないそうだが、もしあの行軍にスキーが使用されていたならば、あんな大きな犠牲者は出なかったであろう」との思召から、二台のスキーを陸軍省に送ってきた¹⁵⁾

と「皇帝の思召」を創作した。ここで筆者が創作と断じる根拠は、第一に小川本人が同文で、「後年弘前師団の油川大尉にこの史実を調べてもらったがまったく不明で識る者もない。もちろんスキーの行方も不明という返事であった」¹⁵⁾と記しているからである。もし小川が、何かの文献に基づいて記したのであれば、「まったく不明で識る者もない」とはならないし、スキーが来た年月も明記されているはずである。第二に、小川が推察したように本当にノルウェーから陸軍省へ直接スキーが送られておれば、国と国のやりとりであるから必ず陸軍省関連の史料が残っているはずである。筆者が関係箇所を捜した範囲では発見されなかった。小川論文は、注意深く読むと「明治35年」とは明示していないが、文章の前後関係から「明治35年」と受け取られるように記述されている。実際に、後の研究者で坂部は「明治三十五年、ノルウェー政府よりスキー二台同連隊に送付してきた」¹⁶⁾と明記している。

ところが、小川論文を見た中野理は、第五連隊の遭難がきっかけで、中野の地元である神戸にスキーが導入されていたことを知る。中野は、「1902(明治35)年に神戸駐在のノルウェー総領事ペーター・オッテセン Peter Ottesen が本国のクリスチャニヤにあるハーゲン商会に注文してスキーを取り寄せた」¹⁷⁾として、ノルウェー商人と共に神戸郊外で滑り、日本人にも教え、軍関係にも進言したと記述している。この進言が、先に述べたオッテセンから日本陸軍へのスキー及び文献寄贈である。中野は、これらの事実を確認すべく、ノルウェー大使館に紹介してオッテセンの神戸滞在期間を確かめ、神戸气象台に降雪記録を聞き、さらに本国の新聞によって裏をとっている。

最近、松下がこの件でノルウェー側と日本側の資料によって研究し、中野のイドレーツブラッ

ド紙の他に、ヤコブ・ボーゲ著『スキーの世界』（1976）に次の文を見つけた。

1901年、日本の一部隊が吹雪の中での訓練中に遭難した。この部隊はスキーを使用していなかった。当時、ペーテル・オッテセンは神戸駐在のノルウェー総領事であり、同氏はクリスチャニア（現オスロ）のハーゲン社に数組のスキーを注文し、1902年から日本人に対してスキーの指導を始めた¹⁸⁾。

松下の報告によれば、オッテセンがいつ、どこで誰にどのように指導したのか日本側の資料不足のため確定できなかったという。しかし、場所については中野が「日本の雪に初めてスキースプールの印された地、いうなればわが国へのスキー初渡来の地、それは六甲山であった」としているが、松下は「神戸市内でも明治36年に15日も降雪があったことから市内で行われた可能性もある」と、中野説を疑問視している。

ところで、中野は、「ハーゲン商会から[スキーが]日本軍隊におくられた¹⁷⁾」と記しているだけで、吉井のいう「ノルウェー政府から2台が寄贈された¹³⁾」スキーとの関連について触れていない。

筆者は、中野がいう「オッテセンが取り寄せ日本軍隊に送ったスキー」と吉井がいう「ノルウェー政府から寄贈されたスキー」は同じスキーではないかと考える。その根拠は、「ピーター・ラッテセン氏が懇切の情を以て、其筋に差出されたる那国軍隊冬季雪中行軍の際使用する『サイ』¹⁹⁾」とあり、ここで「その筋」とは軍隊であることは明らかである。亀岡がいうようにオッテセンは瑞典那威國総領事であり、中野がいうようにノルウェー大使館に勤めていたのであるから、「ノルウェー政府から寄贈された」と考えたとしてもおかしくはない。従って吉井のいうスキーは、ノルウェー政府から直接日本の軍隊に送られてきたものではなく、オッテセンが差し出したスキーだったのではないかと考えられる²³⁾。

第三節 デルメラトクリッフ（明治39年）

小川玄一は「明治三十九年英國大使館付武官デルメーランド・キーフ氏が赴任に際し一台を携行し北海道視察の際之を札幌月寒の歩兵第二十五連隊の某将校に寄贈した⁸⁾（以下、「39年説」）と記述している。これは吉井をはじめ、山崎や福岡らの論文に引用されているが、典拠はいずれも明示されていない。吉井と大野²⁰⁾は39年説で名前が「デルメーランド・キーフ」であるのに対し、山崎¹⁴⁾と坂部¹⁶⁾は「42年、デルメラード・クリーフ」（以下、「42年説」）、瓜生はクリーフは同じだが39年説²¹⁾、福岡は42年説で「デラム・ラードクリッフ²²⁾」である。このように39年説と42年説の二つの説があり、名前も微妙に異なっている。この内山崎は、やはり三瓶に調査を依頼して詳しく記述している。それによれば、①クリーフ大尉は42年12月25日の夜、スキーに乗ってみせた、②寄贈された某将校とは羽田保中尉である²³⁾、とされている。



（図4）デルメラトクリッフ

筆者は、第25連隊長稲村新六が明治43年3月31日に

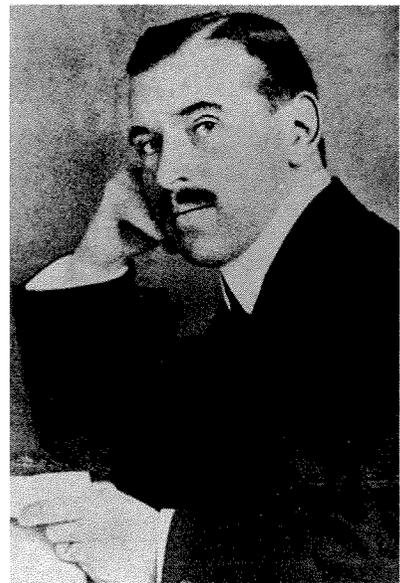
寺内正毅陸軍大臣に宛てて書いた「在隊成績報告」を、2000年7月に防衛研究所図書館で発見した。その文書のタイトルは「英国印度軍パンジャビー歩兵第八十七連隊付陸軍大尉エスデルメラトクリッフ在隊成績報告」といい、それによって①名前は「エス、エー、デルメラトクリッフ」(図4)であること、②明治42年10月1日から歩兵第25連隊第10中隊に属し、43年3月17日に退隊したことが判った。しかし、来日の日時とスキーについては触れられていなかった。さらに、『第二十五連隊日誌』も調べたが、クリッフのスキーについては記載されていなかった。

現時点のまとめとして、クリッフは明治39年に来日したと考えられることから、「39年説」はスキーを持ち込んだ年から唱えられ、「42年説」は札幌でスキーに乗った年から生まれたものと推測される。

第四節 ハンス・コラー (明治41-42年)

北大スキー部に関して原典として扱われているのが、部創立15年にまとめられた小川玄一の「歴史として」である。コラーについて小川は、「明治四十一年コラー先生赴任さる、や其生國スキツルに於ける壯快なる遊戯として、スキーを學生に紹介せんが為に一合携帯せられた」⁸⁾と記述している。ここでは、41年にコラーによってスキーが持ち込まれた(以下、41年説)としている。これが吉井、小川勝次、中野理、大野、福岡等の先行研究に引用されている。ところが、山崎は「明治四十二年獨人ハンス・コラー氏北海道札幌農学校(後に東北帝国大學農學部となり、北海道帝國大學)に、諾威式スキー及び参考指導書を伝う」²⁴⁾(年表)と述べている(「42年説」)。「42年説」は、赤坂富弘の「北大スキー部五十年の歩み」²⁵⁾や『北海道大学七十年史』²⁶⁾等、北大スキー史の正史として定着している。この説は、もともと中野誠一の「コラー先生はレルヒより二年早く、明治四十一年に命を受け、四十二年の夏[に赴任してきた]」²⁷⁾から生まれたものと思われる。つまり、「41年説」と「42年説」は、コラーの来日が明治41年か42年かによって生じたものである。筆者が北大図書館で見つけたコラーの履歴書によれば、コラー(図5)は明治41年に赴任していることが確認された。従って、赴任した年からみた42年説は誤りである。とすれば41年が正解となるはずであるが、コラーは赴任時にスキーを携帯して来なかったことが判明した。それは、コラーが来日したときドイツ語が堪能であったためコラーに寵愛された予科2年の山根甚信が「[コラー]先生は赴任された冬にノルウェー式のスキーを郷里から輸入された」²⁸⁾と語っていることから判る。実際には、41年9月以降に始まったコラーによるドイツ語授業の中でコラーがスキーについて語り、その結果、学生にせがまれて取り寄せることになった。スキーが届いたのは、コラーが赴任して来た6ヶ月ほど後の「明治42年の春」であったと思われる²⁹⁾。

以上のことから、原典となり定説となっている稲田説「北大スキー部の沿革は明治四十一年コラー氏が赴任されたことに遡るを正当とする」³⁰⁾という41年説は誤りで、「コラー来日の翌42年にスキーが輸入された」が史



(図5) 来日当時のハンスコラー

実であった。カラーによってスキーが輸入されたのは、稲田が入学する前であったため稲田が推測で「持ち込んだ」と述べたため、この様に誤った説が定着したと思われる。

第五節 上原勇作第七師団長（明治42年）（図6）

これについては、先に挙げた先行研究の中で中野理が、「明治四十二年、ときの師団長上原勇作が、ノルウェー式とカラフト式のスキーを、師団附属小学校へ寄贈した」³¹⁾と記述していた。中野は出典を明らかにしていないが、次の新聞記事ではなかったかと推測される。

日本に於て最初にスキー技を試みたるは恐らく第七師団の北鎮尋常高等小学校なるべし（尤も樺太には疾くより出来居たるも）。^{ママ}こは陸軍中将上原勇作氏が四十一年中第七師団長に転補し本道の如き冬の長き土地には何か室外に於て運動すべき器具を求め寒気に打勝つ方法必要なりと種々研究の末不図往年瑞典漫遊の際同国人が雪上にてスキーに乗れるもの多かりしことを思い付き早速スキー一挺を同国へ注文の上之れを北鎮小学校へ寄附し尚樺太式スキーも一挺取寄せ専ら生徒に練習せしめんとしたり³²⁾

しかし、この文では寄附された年月が不明である。同じ頃、別の新聞にも北鎮小学校のスキーが紹介されている。

北海道の学習院と謂うべき近文北鎮小學校には上原師団長が樺太式スキーを寄贈したのが四十二年の年で爾来スキー^{ママ}な様に生徒職員達が滑って居ったので、高田に於けるスキーの始めは四十三年〔正しくは四四年…筆者注〕だから北鎮小學校は本邦スキー滑走の嚆矢となつてる筈である³³⁾

これには、42年に寄贈されたとなっているので、中野は両紙を典拠としたとも考えられる。最近、筆者は北大図書館で「札幌毎日新聞」に、さらに詳しく報じられていたことを発見した。

▲瑞典式の傳來／去る二十二年〔42年—筆者注〕の二月頃時の七師團長上原將軍が一日北鎮小學校に臨み石井前校長に向ひ冬季間學校兒童に戶外運動を奨励する為何にか良方法は無いものであろうか私〔上原師團長—筆者注〕が嘗て歐州に在った時瑞典ではスキーを用ゐて雪上を自由自在に駆け廻つてゐたが我が國にも試みに用ゐてはどんなものでせうと云はれたが其の後間もなく將軍は彼の國より見本として二組のスキーを取寄せたがこれぞ我が國にスキーを見た初である³⁴⁾

以上のことから、上原師団長³⁴⁾が北鎮尋常高等小学校³⁵⁾にノルウェー式と樺太式のスキー二組みを寄贈したのは、中野の「上原師団長が寄贈したのは42年」であり、札幌毎日新聞には「2月頃」と記述されている。最近見つけた師団長の日誌には「2月24日 小学校遊戯」³⁶⁾と記されていたので、明治42年2月24日に寄贈されたと思われる。

先に見た新聞に「不図往年瑞典漫遊の際同国人が雪上にてスキーに乗れるもの多かりしことを思い付



（図6） 上原勇作第七師団長

き」とあるように、上原は本道の如き冬の長い土地で寒気に打ち勝つためには、屋外において運動できる器具が必要であると考え、スウェーデンで見たスキーを思い出したのである。上原は、明治14年から五年間、フランスに留学した他に数度に亘って欧州に軍事研究のため渡航している。この点でいえば、第十三師団長・長岡外史も軍事視察旅行のため訪れた北欧でスキーをみて、「日本の東北諸国の冬期間における文明発展にはもってこいの好器具である」ことを直感し、その体験からレルヒのスキー講習会・スキー発祥に繋がったといわれている³⁵⁾。上原と長岡の両師団長のスキー導入の動機は同じものであった。

第六節 ^{スウェーデン} 杉村虎一 瑞典公使のスキー (明治43年)

これについては、高田のスキー発祥との関わりがあり、明治43年12月17日、このスキーが第十三師団に送られてきたことから、高田のスキー前史として有名である。同師団長の長岡外史が陸軍省から送られてきた杉村のスキー二台を使って、鶴見大佐や明石中佐にスキーの研究を命じている³⁶⁾。ところが、送られてきた年について諸説がある。先ず、吉井による「明治四十三年諾威公使杉村虎一氏より我陸軍省へ軍用スキー二台を贈って来た」¹³⁾という43年説、次に山崎の「明治四十二年に杉村瑞典公使より送って来た」³⁷⁾という42年説である。さらに瓜生も42年説ではあるが「そのスキーは陸軍省から札幌におくられ、翌年高田に転送されてきた」²¹⁾と記述している。その他の小川(勝)、坂部、福岡らは、年度を明示していない。果たして42年説と43年説のどちらが正しいのか。

これについては松下が防衛研究所図書館に保管されていた杉村の「明治43年6月13日付け親書」(図7)を発見したことによって、43年が正しいという結論が出された³⁸⁾。尚、その時松下は木下秀明が「保存されている筈のない…通牒」³⁹⁾と述べていた「陸軍省より第十三師団への通牒」の写しともいえる「陸軍省より第十三師団への通牒案」を発見した。福岡は杉村が我が国にスキーを贈った動機について、第五連隊の八甲田山遭難が世界的なニュースになったことと、後に述べる留学中の高等師範学校教官・永井道明の薦めによる⁴⁰⁾、と述べている。荒巻廣政は、明治41-42年にスウェーデンでスキーを行ったとき地元の新聞が永井道明を杉村虎一と誤って報道されたことが機縁となって、杉村がスキーに関心を持つようになり陸軍にスキーを贈ることになったと記述している⁴¹⁾。永井については、後に述べるがいずれにしても、杉村のスキーについては永井が関係していたことは確かなようである。

以上のことから、松下の研究によってスウェーデン公使の杉村虎一が、1910(明治43)年に

傳者当瑞典國軍隊ニ於テ
 冬期雪中ニ於テ先ず行軍
 須臾等ノ為ニ「スキー」トモテ
 使用シ大ニ便益ヲ得存候
 本邦ニ於テモ北國地方又ハ
 滿州韓國等ニ於テ「スキー」
 ヲ使用スハ「ト」得可ク或
 我ガ陸軍ニ於テモ亦試用
 相成候ニ如何ト存候
 二件軍用「スキー」ニ組高岡
 ヲ直航「船」便ヲ以テ送付
 申上儀右「年」ニ使用候
 説明書ニ別封書留郵便
 ヲ以テ申送付申上之
 又本年五月巴里旅行ノ
 雜誌「L'Asie française」
 ニ掲載シ「Les Minimes」
 及「Kunskapskolan」(1909年)
 ト題シ記事ニ本年
 二月三十日巴里旅行ノ

(図7) 諾威公使杉村虎一氏より陸軍省への書簡(防衛研究所図書館所蔵)

技術書1冊（雑誌2冊）とスキー2台を陸軍省に寄贈したという史実が確定している。

第三章 スキーの試乗

第一節 伝兵衛（元禄14年）

先行研究では、1810（文化7）年に中川五郎治が捕虜となり、その時日本人として初めてロシアでスキーを履いたといわれていた⁴²⁾。長岡は、中川五郎治が帰国後聞き取りによって、1816（文化13）年に作られた『異境雑話』に、ストックのイラストが描かれているのを見て、「初期のスキー文献としては注目すべきもの」⁴³⁾であるとしている。しかし原典を読むと、この杖は現地で、五郎治が鹿に乗せられた時に使ったものであり、スキーに関係のない「杖」である。

ところで、これとは別に1701（元禄14）年、大阪商人の伝兵衛が商船で航海中に強風によって約6ヶ月間漂流し、北千島に打ち上げられ捕虜となり、やはりロシアでスキーを履いていた⁴⁴⁾。デンベエは五郎治より百年以上早く、日本人として最初にスキーに乗ったことになる。これは、いずれも捕虜として輸送される時に、歩く道具としてロシア式スキー、即ちストーを履かされている。勿論、履いたというだけのことである。

第二節 河合七郎（明治26年）

山岳スキー家であった河合七郎（ペンネーム河合裸石）が、

まだ北海道でスキーという名前さえ知られていなかった明治二十六年頃（ということは、裸石十歳の頃になるが）カムチャッカに出稼ぎに行っていた近所の漁民から「ストー」というアザラシの皮を張ったスキーの原型のようなものを土産にもらって、雪の上で遊んだ⁴⁵⁾

と述べたという。河合は、北海タイムスの記者として、同紙にスキー記事を担当する山岳スキー研究者である。1893（明治26）年頃、河合が履いたカムチャッカ・スキー（ストー）は、当時露式寒敷と呼ばれていたが、おそらく北海道で履かれた最初のカンジキ・スキーであった。

第三節 野村治三郎（明治37年）

吉井は、青森県野辺地町の野村治三郎が、1904（明治37）年、外国の雑誌をみて東京の某運動具店を通じてスキー2台を輸入し、内一台を同県五戸町にいた同氏の従兄・藤田新太郎に贈り共に試用したが、使用方法がわからずスケートのように凍った雪の上を滑ったが面白くないので終に使用しなかった¹³⁾、と述べている。典拠は不明だが、購入したスキーは今[1930年頃；筆者注]より短く杖は単杖であったという。

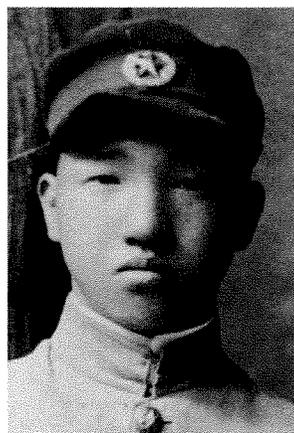
山崎は、それを引きながら藤田新太郎の資料で「そのスキーは矢張り諾威スキーで長さは約七尺七、八寸位ると云う素晴らしく大きなもの、底部に二條の溝があって…ピンディングの装置は全部革美錠より成り」⁴⁶⁾と説明しているが、小川（勝）は、次のように論述している。

東京の丸善に依頼し、二台輸入したという事実は、そのいきさつもはっきりしている。そのスキーはノールウェー製で締具は革と美錠から成り金具はついていなかった…（中略）…長さは八尺に近かったといわれ、杖は二本杖だった¹⁵⁾。

第四節 ハンス・カラー（明治42年）

先の渡来の項でも述べたごとく、カラーが輸入したスキーは、1909（明治42）年の春になった頃、札幌に届いたと推測される。その翌シーズンの初冬、スキーに乗る要領が解らなかったカラーは、札幌に雪が積もったある日、北大予科2年の教え子・山根甚信（図8）にスキーを履かせた。場所はカラーが独身時代に下宿していた北大の加藤教授の旧石狩街道筋にあった庭園内であった。スキーを履された山根の胴に手綱をまきつけて、カラーが思い切り引っ張った。以下山根は、

私の七転八倒するのを見てカナダ生まれの加藤夫人が腹を抱えて笑われたのを覚えている。日本で最初にスキーを履いたのは私だと云っても誰も信ずるものはないであろうが、レルヒ中佐が奥国式スキーとスキー術を日本に持ち込んだのはその次の冬である²⁸⁾



（図8）北大生最初のスキーヤー山根甚信

と回想している。この回想文は、約50年前のことを回顧しているので信頼できないのではないかという指摘もあるが、山根はこのことを40年前、すなわち山根がスキーをはいた10年後にスキー部の中野誠一に語っている。中野はそれを「Y教授の実話」として、大正13年発行の『山とスキー』⁴⁷⁾に記している。中野が同論文を書いた時、山根はすでに教授になっていたため、イニシャルでY教授としたのであるが、後に瓜生がこれを読んで実名が山根と特定できずに、そのまま「Y教授」とし場所を北大構内に変更して、「カラーがY教授の腰にロープをまき猛然と走り出した。Y教授のスキーは滑り出したが数メートルもいかないうちに雪の上に投げ出され、その反動でカラーも仰向けにひっくり返った」⁴⁸⁾と記述した。中野論文を正確に書き改めると「今はY教授の学生時代にカラーにスキーを履かされた」のである。

このように、明治42-43年のシーズン初めに、カラーに頼まれて山根がスキーを履いた（履かされた）ことがカラーのスキー事始めである。しかし、このことは北大スキー史は勿論、スキー界でも全く知られていない。定説になっている北大スキー部の稲田昌植や角倉邦彦らが、北大構内でカラーのスキーを履いたのも同じシーズンだが、山根がスキーを履いた後である。

さらに、馬籠屋で4乃至5台のスキーを作らせて稲田や角倉らが三角山に通い始めたのは、さらに翌シーズンの、1911（明治44）年2月⁴⁹⁾であり、高田でレルヒが講習を始めた1ヶ月後であった。

第五節 永井道明（明治43年）

荒巻が「秋田県地方スキー発達史」に、

体操研究の爲め欧州に留学して居た東高師範永井道明氏、四十二年帰朝特殊な関係から十二月二十四日体操講習に来県、此時スキーを持参講習員に説明試乗したるに秋田のスキーは始まる。当時試乗者に山口龍輔氏等がある⁵⁰⁾

と記していることから、1910（明治43）年、永井道明は持ち帰ったスキーで秋田中学の山口龍輔教諭に試走させたことがわかる。この体験について山口本人が、

明治四十三年十二月二十六、七日頃に永井道明先生が秋田へ体操の講習に来られてスキーを運動具としても交通、軍事上から見ても極めて有用なものだという説明のもとに実

演して見せてくれ、又私達会員にも、代わる代わる引かけてみよというのでおそるおそる歩いて見た⁵¹⁾

と回顧している。山口はその後、45年2月の秋田講習会に参加して、さらに翌大正元年12月の高田講習を受けるなど、秋田県スキーの発展に貢献している。

永井のスキーについては後に取り上げるが、中野浩一の研究がある⁵²⁾。

第4章 スキー技術の習得

第一節 三瓶勝美(明治28年)

日本人で最初にスキー技術を習得したのは、「北海道スキーの父」ともいえる三瓶勝美(図9)であろう。三瓶は、1895(明治28)年、父が出征中に樺太スキーを履き、ある程度のスキー技術を身につけたようである。三瓶は、次のように回顧している。

私が初めてスキーをはいて見たのは十三の時(今から丁度三十三年前)父が日清戦争に出征の留守中で当時のスキーは樺太のカンチキスキーとでも申しますかそのスキーは父が愛用してゐたのですが留守中でもありそれを穿き父の猟銃を持ち出して兎を捕った事を覚えてゐますがその痛快さは今でも忘れる事が出来ません⁵³⁾。

これは、彼が生れた年から計算すると明治28年となり、日清戦争に父親が出征中という記述や三瓶が語った昭和3年の「今から丁度三十三年前」と一致する。ここには、狩猟のために平地を歩くスキー技術をマスターしていたことがわかる。さらに翌年の冬、勝美は樺太で働いていたという建築家の大河原に、スキーを製作してもらい練習に打ち込んだという⁵³⁾。

これについて、瓜生は次のように記述している。

彼は北海道江別町の出身で陸軍士官学校を卒えた。彼の父も軍人で、その父が明治二十八年の日清戦争に出征したとき、「スキー」を持ちかえた。それを彼は幼少のころから取りまわし、明治三十年ごろには、直滑降、平地滑走、回転までできた、というから、すくなくとも彼の範囲にも、幾人かのスキーヤーがいたはずである⁵⁴⁾。

瓜生は、これを山崎の「直滑降、平地滑走はもちろん、すでにスイングまでできたという」⁵⁵⁾から引用したように思われるが、スイングつまり回転までできたとは考えにくい⁵⁶⁾。なぜなら、回転するということは斜面を滑走することになるが、彼の生家は札幌郊外の篠津村、つまり石狩川沿いの平坦な田園地帯であり山や坂が近くにないこと、さらに勝美自身もそのスキーをアルペン用としてではなく狩猟のために履いたといっているからである。さらに決定的なことは、10年後に本人が、次のように証言していることである。

その年[明治43年6月に樺太守備隊の任務を終えて]札幌に帰り瑞西公使松村氏[正しくは杉村虎一瑞典公使]が送ったスエーデン式スキーを歩兵第二十五連隊で私と中沢氏が付近のスロープで滑ったが直滑降と平地滑走のみで丁度その頃レルヒ中佐がやって来た⁵³⁾。

レルヒが来日したのは、1910(明治43)年11月末であることか



(図9) レルヒからスキーを学んだ頃の三瓶勝美(1912年)

ら、三瓶のスキー体験は同年11乃至12月頃になる。尚、ここで三瓶は杉村のスキーを使用したと述べているが、松下研究から「杉村がスウェーデン式スキーを発送したのが1910年6月」なので、それが日本に到着したのは3乃至4ヶ月後であり、三瓶が樺太守備隊の任務を終えて札幌に帰着した同年6月には、まだ届いていないはずである。従って、杉村のスキーを履いたというのは三瓶の思い違いで、1910年3月に英国武官S, A, デルメラトクリッフが、札幌を去るにあたって羽田保中尉に贈ったといわれているスキーであろう。

つまり、1910(明治43)年にデルメラトクリッフが第25連隊の羽田に寄贈したスキーを、三瓶と中澤らが履いて練習したのでこの二人は、明治45年2月の旭川におけるレルヒ講習会に積極的に名乗りを上げ、第二五連隊の指示を受け参加、他の受講者より一步秀でていたのである。これが、後に札幌や小樽スキー発展に大きな役割を果たすことになった。

第二節 永井道明(明治40-41年)

中野によれば、東京高等師範学校の永井道明(図10)は「国民体育」研究(特に体操問題の解決)のため欧米に、明治40年8月から1年間留学し、その間にスウェーデンでスキー技術を習得した⁵⁷⁾、という。ところで、永井は持ち帰ったスキーで、1910(明治43)年に秋田中学の山口龍輔教諭に試走させたことについては、すでに述べた通りである。永井の覚えてきたスキー技術は、スキーを紹介した程度に止まり、その後のスキー普及活動への影響は乏しかったと、中野はまとめている。ところで、

スキー練習中のエピソードで、永井が市内の写真屋に杉村虎一スウェーデン公使と間違われ、スウェーデンの新聞や雑誌に掲載され、絵はがきにもなった⁵²⁾

このように永井の練習を地元新聞が杉村と間違って報道したことがきっかけとなって、杉村が日本陸軍省にスキーと技術書を贈ることになった。永井のスキーは、秋田においてスキーを実演したことよりも、スウェーデンの新聞や雑誌に誤って報道されたことの方が、日本スキー界に大きな影響を与えたのである。

第三節 北鎮小学校(明治43年)

上原師団長が、旭川北鎮小学校にスウェーデン式と樺太式スキーを寄贈したことはすでに述べた。その後について、先に挙げた中野理は「当時ここではその使用法に通ずるものもいなかった」³²⁾とスキーは使用されぬままになってしまったとしている。しかし、先の新聞の「上原師団長が樺太式スキーを寄贈したのが四十二年の年で爾来スキーな様に生徒職員達が滑って居ったので、高田に於けるスキーの始めは四十三年だから北鎮小学校は本邦スキー滑走の嚆矢となつて居る筈である」³³⁾と「北鎮小学校は本邦スキー滑走の嚆矢」と明言している。にもかかわらず何



(図10) スキーの練習をする永井道明

故中野はそれを採用しなかったのか。その根拠は示されていない。レルヒ研究者としては「レルヒによる高田が本邦スキーの嚆矢」という歴史認識に固執したためではないかと推測される。

実際に北鎮小学校のスキーは、どの程度行われたのか、他の文献にあたってみよう。先ず大内中尉が「四十二年諾威式及樺太式を製作せしめ、親しく之を試みられたるのみならず、北鎮小学校にも之を奨励され、今日[明治45年5月]猶数十台のスキーあり」⁵⁷⁾と述べている。次に同校の卒業生であった白井長助(当時、満州国五大学ハルピン学院教授)は、

僕とスキーの因縁は遠く三十年の昔に溯る。明治四十四～五年の冬、越後高田に於てはじめて日本人にヨーロッパの近代スキーの理論と技術とを伝えた日本スキー界の恩人オーストリー奥太利のテオドル・フォン・レルヒ中佐は北海道にも来た。中佐のスキーの操作や滑走振りを物珍しく眺めて居た僕ら(旭川近文の北鎮小学校の小学生達)は、聽て師団の好意で学校に備えつけられた十数台?のスキーを休憩時間や放課後に、喧嘩騒ぎまでして奪い合つてスキーをつけて学校の裏庭や、それにづく春光台の南斜面で、盛んに滑り?転んだものだ⁵⁸⁾

と回顧しているので、中野の結論とは異なっているようである。その辺の経過は札幌毎日新聞に詳しく、次のように報じられていた。

▲試用の嚆矢/上原將軍にはその二組のスキーを北鎮小學校に寄贈されたが誰も其の使用の方が知れないで徒に庫裏に納めて有つたが僕[武藏校長一筆者注]が石井校長に更つて赴任して間もなく庫中にて之を認め何者であるかと訓導に聞くとスケートの類で雪上を滑る具であると言ふのでさらば之を雪上に試みんとシャツ一枚になり校庭に倒れつ轉びつ一生懸命に練習した▲二十組を作る/所が上原將軍は僕[武藏校長一筆者注]がスキーの練習をしてゐる所を御覧じたか慥か其の翌日學校に來られ僕に向てスキーはどうだ味く遣れるかと聞かれるのでスキーとは何んですかと聞くと君昨日試みてみたではないか云はれたスキーですか私はスケートの一種聞いてみました兎に角至極結構なものです練習すると大丈夫遣れませうと御對へするとそればは旭川馬櫓屋を呼んで百組ほど造らせて兒童にも試みさせてはどうだと云はれので百組は多いから二十組丈造らせまうと直ぐさま馬櫓屋を呼んで二十組作らせて兒童に試みさせたは去る四十三年十一月でした▲現時の練習/素より素人の我流でしたが然し兒童も兎に角自由に駆け廻る事は出来ましたが坂を下る時の呼吸がどうしても知れないで樺太に問ひ合せ漸く其の方法が知れましたが此度は高田師團の方からレルヒ中佐が當師團に參られてスキーの練習を初めましたので私[武藏校長一筆者注]も其の使用の方法を親しく實見もし職員にはレルヒ中佐に就いて稽古させて居ますから我校のスキーも一面目を改むるも近い事があるやうと楽しんでます³⁴⁾。

以上の文献から、当時の状況を見ていくと次のようになる。

寄贈されたスキーは、「誰も其の使用の方が知れないで徒に庫裏に納めて有つた。」寄贈を受けた石井校長には、師団長のスキーに対する熱意が伝わらなかったようである。ところが、翌43年9月に武藏校長が着任し、校庭に積雪が見られる頃、校長が庫裏に納めてあったスキーを見つけ、訓導に「何ものであるか」と聞くと、訓導曰く「スケートの類で雪上を滑る具である。」そこで武藏校長は、それを引っぱり出して「シャツ一枚になり校庭に倒れつ轉びつ一生懸命に練習した」、これが同年の10月末か11月初旬であろう。たまたまその練習姿を見ていた上原が翌日「スキーはどうだ味く遣れるか」と聞くと、校長は「至極結構なものです練習すると大丈夫遣れませう」と答える。それを聞いた上原は「旭川馬櫓屋を呼んで百組ほど造らせて兒童に

も試みさせてはどうだ」と校長にいい、結局、20組を作らせて児童に履かせることになった。それが43年11月であった。その馬櫓屋について、上原は「旭川馬櫓屋」といつているが、これは屋号だろうか、それとも旭川の馬櫓店ということだろうか。

さきの小樽新聞には「旭川町一条通櫓製造者某に託して」と記されていたので、あわせて考えると、この時のスキー製造業者は「旭川町一条通りにあった旭川馬櫓屋」と思われる。

当時の『上川便覧』(明治35年7月18日発行)をみると、旭川町一条通り七丁目に「櫓、荷車其他製造元並ニ大販賣所 森田龜次郎」(図11)がいる。森田の店は、翌36年に発行された『上川発達史』にも載っている。高田の場合は、大工と鉄工場にスキーを作らせているが、北海道の場合、スキーと同じように木材を曲げてつくるそり屋がいたので、とりあえず馬櫓屋に注文したようである。この発想は、北大生がカラーのスキーを見本に札幌の馬櫓屋に注文したことと一致する。森田龜次郎は、大正4年に発行された『旭川案内』にも「八条通り八丁目」に移転して「馬車馬櫓製造 森田工場」として経営している。大正4年の『旭川案内』をみると、その時点で馬車馬櫓製造業者として森田工場の他に、妻木米次郎(二ノ十一左九)と煙山太郎(一ノ一右十)がいた。しかし、この両者はいずれも『上川発達史』に掲載されておらず、43年には開業していない可能性もあり、もし開業していたとしても住所が「一条通り七丁目」ではない。従って、妻木も煙山も上原のいう「旭川馬櫓屋」とは、違うと考えられる。

以上の考察から、上原が製作を依頼した馬櫓屋は森田龜次郎の、後の「森田工場」であったと特定してもよいようである。なお、森田龜次郎は、第七師団指定の業者であったと思われる。

製作されたスキーは、先の小樽新聞が「瑞典式廿挺、樺太式五挺」と報じているが、樺太式スキーは高価であることや、その後の練習に使われたスキーがノルウェー式スキーだったことなどから、札幌新聞の「旭川馬櫓屋に二十組」はノルウェー式スキーだけ20台作らせたものと考えられる。つまり、43年11月に旭川町一条通の旭川馬櫓屋「森田龜次郎」に20台のノルウェー式スキーを製作させたのである。

北海道のスキーづくりは、[北大スキー部が作らせた]豊平の馬櫓屋の他はまだはじまっていなかった。旭川では早くからスキーをつくったらしいし、小樽や倶知安などの草創の話も聞くが、いつのころかは明確ではない⁵⁹⁾

と瓜生は記述している。その後、佐藤徹雄は、

旭川師団の御用商人であった神崎四郎が、師団のスキーを見本に、先曲げに苦勞しながら試作をくりかえして、苦心の第一号を完成させた。明治四十五年十月末であり、旭川の民間スキー作りの最初である⁶⁰⁾

と書いているが、これよりも森田龜次郎は2年も早い。尚、北大スキー部が作らせた豊平の馬櫓屋のスキー製作は、44年2月であったので、森田龜次郎が現在判明している北海道のスキー作り第一号といえる。

43年11月、出来上がった20組のスキーで滑走を始めたが、中野は「当時ここでは、その使用法に通ずるものもいなかった」といい、新聞も「練習を試みたるも当時別に教師とてなけれ



(図11) 櫓、荷車其他製造元 森田龜次郎

ば、ひっきょう無茶苦茶乗りに過ぎざりき」と練習の成果を否定的に記述している。これに対し「スキーな様に生徒職員達が滑って居った」、卒業生・白井の「休憩時間や放課後に、喧嘩騒ぎまでして奪い合ってスキーをつけて学校の裏庭や、それにづく春光台の南斜面で、盛んに滑り？転んだものだ」、さらに『北鎮小学校校友雑誌』に、

此の時代は所謂スキーの揺籃時代で一般には未だ普及されなかったが本校の児童は子供用を購入して三々五々滑走する者があつた。明治四十三年の冬である。スキーを穿いて春光台の頂上より滑走した本校最初の児童は、当時の師団長の上原勇作閣下令嗣七之助君(当時六年生)現在の上原子爵である⁶⁷⁾

とあるように肯定的である。どちらが史実だったのか。札幌新聞は武蔵校長談として「素より素人の我流でしたが然し児童も兎に角自由に駆け廻る事は出来ました」という。ところが「坂を下る時の呼吸がどうしても知れない」ので「樺太に問ひ合せ漸く其の方法が知れました」と語っている。これは現実的で、実際にあったことではないかと思われる。高田でもレルヒが来る前に鶴見らが練習したが「我流ではあつたが平地はなんとかなつた」のである。鶴見たちが諦めたのは斜面を滑ることであつた。北鎮小学校の場合、それを樺太に問ひ合せて漸くその方法が解つたという。このようなことから、白井の回顧にあるように校庭に続く春光台の南斜面で転びながら、盛んに滑つたものと思われる。

第四節 鶴見宜信(明治43年)

陸軍省に送られてきた杉村虎一スウェーデン公使のスキーが、高田のスキー発祥に関連することはすでに述べた。高田との関わりは、明治43年12月17日に陸軍省の竹島音次郎から高田に送られた通牒に始まる。

壘国武官ド・レルヒ少佐は斯道に熟達の趣に付右スキー及書籍及送付候條適宜の方法に依り実験の上其成績及御意見報告相成度依命及通牒候也⁶¹⁾

これによってレルヒ少佐(当時)がスキーの達人であることを知つた長岡師団長は「スキーを覚える好機が来た」と直ちに歩兵第五十八連隊長・堀内文次郎大佐を委員長とするスキー研究委員会を作つた。長岡師団長はスキー研究委員の鶴見宜信大尉に、「日本には以前からスキーはあつたのだ。あべこべにレルヒに教えてやるというくらいまでに研究せよ」⁶²⁾と命じた。すでに見たごとく、この頃には先の旭川北鎮小学校の他に、コラーのスキーで北大生も滑つていた。このように日本には、スキーを使用している事実があつたが、報道されていなくてもないので、長岡が知るはずがない。鶴見たちは、長岡師団長から与えられたフランス語の本を山口十八に翻訳してもらい4乃至5枚に書いた半紙をテキストにした⁶³⁾。

先の陸軍省の通牒の冒頭部分に、「瑞典國軍隊用スキー二個及之ニ関スル書籍三冊同國駐劄杉村公使ヨリ当省大臣へ寄贈有之候」⁶¹⁾と書籍が三冊と記されていたが、実際に高田には一冊しか送られてこなかつた。それは『スキー』⁶⁴⁾によれば『Guide du Skieur』(Bernard,1909)であつたという。他の二冊はどのような書籍だつたのか。これについては松下が発見した「杉村公使からの親書」(図7)の次の文によって解明された。

「スキー」ノ使用法説明書ハ別封書留郵便ヲ以テ御送付申上候又本年三月巴里発行ノ雑誌「L'Asie française」ニ掲載セル「Les memoires de Kouropatkine」(一四四頁)ト題セル記事并ニ本年二月二十六日巴里発行ノ週刊雑誌「L'Opinion」ニ掲ゲタル「Les le-cons de La Guerre de Mantchourie, La nouvelle armee japonaise」(二六七頁)ト題スル記事

ハー読大ニ面白ク感ジ候ニ付前記「スキーノ説明書ト同封御送付申上候⁶⁸⁾

それは兎も角、鶴見達は懸命にスキーの練習をしたが、指導者がいないため「緩傾斜地に於て各種技術の実習を行ひたるに滑降は僅かに之を行ひ得たる」も他のスキー技術は習得できず諦めざるを得なかった。委員のなかには、スキーは雪国に不必要であるという者まででありさまであった。このように鶴見たちの努力は、ほとんど徒勞に終わった。この委員会は前年12月27日に命じられ、29日に練習を開始して1週間後の1月4日には解散してしまい、レルヒの到着を待つことになる⁶⁹⁾。

おわりに

本論文の4類型のいずれにも属さないが、発祥前史の中に含まれると思われるものがある。それは、明治42年12月にオーストリアのシーメンス社⁶⁰⁾の社員であったアーゴン・フォン・クラッツァー (Egon von Kratzer) で、スキーを持参して来日し、すぐに富士山麓でスキーを行っている。社用で秋田県小坂鉱山に行き、おそらくそれが縁になったのであろう44年3月にスキー講習会に招かれている。途中山形県板谷の五色温泉がスキーに適しているを知り、仲間と宗川旅館を拠点にスキーを行い、大正元年に外人仲間24人で日本アルペンスキークラブを結成した。「彼らのスキーは日本人にも広まり、五色温泉は“スキーのメッカ”として定着してい⁶⁵⁾」ったと山形新聞は報じている。

以上の考察から、現時点での発祥前史は、(表1)のように概括することができる。

今研究で明らかになったことは、以下のようにまとめることができる。

先ず、①「スキーの渡来」の最初である松川大尉による1895(明治28)年のスキーに関して、その原典が明らかにできたこと、②明治35年の歩兵第五連隊の八甲田山遭難でノルウェー政府から寄贈されたスキー2台は、神戸駐在のノルウェー総領事ペーター・オッテセンが本国に注文して取り寄せ寄贈したものであること、③明治39年クリッフのスキーは来日による「スキー

(表1) 日本スキー発祥前史 (中浦皓至; 2001.9 作製)

順	試乗	紹介	輸入	練習	年 代	記 述	記述者等
①	○				1701(元禄14)年	大阪商人の伝兵衛が捕虜となってロシアでスキーを履く	ズナメンスキー
②		○			1809(文化6)年	『北蝦夷図説』に露式スキーのストーが掲載された	間宮林蔵
③	○				1810(文化7)年	中川五郎治が捕虜となりロシアでスキーを履く	『五郎治申上荒増』
④	○				1893(明治26)年	山岳スキー家・河合七郎が北海道でカムチャッカのスキーを履いて遊ぶ	渡辺 惇
⑤				○	1895(明治28)年	三瓶勝美が父の出征中に樺太スキーで練習する	中浦皓至
⑥				○	同	松川敏胤大尉が日清戦役の凱旋に際し満州からスキーを持参した	小川玄一
⑦		○			1896(明治29)年	雑誌『少國民』(第8年8号)に「スキ」駆け(ジャンプ)が掲載された	『少國民』
⑧	○				1902(明治35)年	神戸駐在ノルウェー総領事ペーター・オッテセンが輸入したスキー履く	松下高信
⑨			○		同	八甲田山遭難でノルウェー政府(オッテセン)からスキー2台が寄贈された	中浦皓至
⑩		○			1903(明治36)年	『偕行社記事』(第307号)に亀岡が那國軍雪中行軍のサイ(スキー)を紹介	亀岡泰辰
⑪	○		○		1904(明治37)年	青森県野辺地の野村治三郎が雑誌をみてスキー2台を輸入し試乗した	山崎紫峰
⑫			○		1906(明治39)年	英國武官S.A.デルメラトクリッフがスキー1台を携帯して来日した	山崎紫峰
⑬				○	1908(明治41)年	東京高等師範学校の永井道明がスウェーデンでスキー技術を習得した	中野浩一
⑭				○	1909(明治42)年	北大のカラーがスイスから輸入したスキーを予科生に見せた	中浦皓至
⑮	○				同	北大予科2年山根善信が石狩街道筋の庭園内でカラーのスキーを履く	中浦皓至
⑯			○		同	上原師団長がスウェーデン式と樺太式スキーを旭川北鎮小学校に寄贈した	中野 理
⑰				○	同	横派シーメンス商社のクラッツァーがスキーを持って来日し富士山麓で滑降	山崎紫峰
⑱			○	○	1910(明治43)年	上原が森田亀次郎に20台作らせたスキーで北鎮小学校の先生と生徒が練習	中浦皓至
⑲			○		同	瑞典公使杉村虎一が技術書1冊(雑誌2冊)とスキー2台を陸軍省に寄贈した	松下高信
⑳				○	同	クリッフが第二五連隊の羽田に寄贈したスキーを三瓶勝美らが履く	山崎紫峰
㉑				○	同	杉村のスキーが高田に送られレルヒ来日前に鶴見宜信らが練習した	『スキー』1号
㉒	○				同	永井道明が持ち帰ったスキーで秋田中学の山口龍輔教諭が試走した	山崎紫峰

(注1) 表のうち「記述者等」の欄は原著(者)もしくは最新の研究者、

(注2) 同じく「輸入」には「持ち込み」の場合も含めている

の渡来」であり、42年は「スキーの試乗」から生まれた説と推測されること、「在隊成績報告」によればクリフは「S,A,デルメラトクリフ」であること、④コラーが、明治41年の来日時
にスキーを持参したという定説は誤りで、コラー来日の翌42年にスキーを輸入したこと、北大
の初試乗は従来言われていた北大構内ではなくコラーが下宿していた北大の加藤教授の石狩街
道筋庭園であり、北大予科2年の山根甚信であったこと、⑤日本人として初めてスキーを履い
たのは、従来いわれていた中川五郎治ではなく、それより100年も早い1701(元禄14)年、大
阪商人の伝兵衛がロシアで捕虜となった時であること、⑥日本人として初めてスキー技術を習
得したのは、明治28年の三瓶勝美でなかったかと思われること、⑦北鎮小学校のスキーにつ
いては、明治42年2月、第七師団長上原勇作が将校子弟の同校児童に冬期間の体力向上のため、
瑞典式と樺太式スキーを寄付したこと、上原は旭川橈製造者の森田亀次郎(旭川町一条通り七
丁目)に瑞典式スキーを甘挺造らせ、そのスキーで運動場や近くの春光台を自由に駆け廻る事
が出来ようになった。それは、レルヒが高田に来る前、明治43年11月であった。これは、
筆者の知る限り「学校スキー」として、また「スキーの製作」としても日本で最も早い、⑧表
1を見て分かるように発祥前史の初め6項目までは、いずれもストーリーであったこと、などであ
る。

〈付記〉

本論文は、日本体育学会第52回大会(北海道大学 2001)にて、発表した論文に補筆修正した
ものである。

〈注釈・引用文献〉

- (注1) これについては、川口光雄が日本伝来の藁靴、かんじき、田下駄、ソリなどをスキー発祥との関連で論
じ、「我が国でスキーの原形を求めることは非常に困難」(ACADEMIA, 南山学会, 1961, p.46)としている。
- (注2) この頃北大スキー部は、道内の山々の初登頂を次々と果たしていた。この札幌岳の松川隊は、9名で盤
の沢から登山し冷水澤に降り、烏帽子、三段を経て琴似に5日間の日程で行った(記念創立拾五年、北海道
帝国大学文武会スキー部, 1926, p.383)
- (注3) この件に関連して福岡が「これとはべつに、明治四十二年に、さきの青森連隊の悲劇に同情して、ノル
ウェー政府から二台のスキーがおくられてきたという説がある」と記述している。この福岡説は、その後ほ
んど無視されているようにみられる。福岡が出典を示していないので断定できないが、小川説の検証の際、
筆者が捜した範囲では、陸軍省に関連資料が残されていない。
- (注4) 上原勇作の略歴は、安政3(1856)年11月に都城で生まれ、幼年で養子になり上原姓となった。陸軍
幼年学校から陸軍士官学校へ進み、明治12年に工兵科を首席で卒業した。同14年、フランス留学を命ぜら
れ、5年間にわたってヨーロッパの軍事研究を行った。これ以外にも数度渡欧しているので、その折りに見
たスウェーデンのスキーを思い出したものである。上原は、明治41年12月に旭川に着任し、44年9月に第
14師団長として宇都宮に転出している。従って、後に大野精七が「レルヒが旭川にきた明治45年、当時第七
師団長は上原勇作中将であった」¹¹⁾と記述しているのは明らかに誤っている。上原は日露戦争の功績で男爵
を授けられ、陸軍の三長官即ち陸軍大臣、教育総監、参謀総長を歴任し、昭和8年に78歳で他界した。
- (注5) 次に北鎮小学校について、この学校は1901(明治34)年1月、第七師団私設教育所として開校した(旭
川市立北鎮小学校、本校の沿革、北鎮小学校経営概況, 1964)。先に中野が「師団附属小学校」と記述してい
たのは、このことによると思われる。しかし、同校は上原師団長が後援PTA会長をしていた1911(明治44)

年には旭川公立の尋常高等小学校になっていた。戦後は旭川市立北鎮小学校となって現在に至っている。当時の地図を見ると判るように、同校校庭のすぐ傍に近文演習場がある。レルヒがスキー講習会の際に使用した春光台である。従って、児童や職員がスキーに乗っていたということも地形的には納得できる。

(注6) 上原日記には、ほぼ毎日の出来事を項目だけ記されている。尚、この頃スキーのことを「遊戯」と書いている新聞がみられる。(中浦皓至, 上原師団長と旭川北鎮小学校のスキーについて, 平成13年北海道体育学会発表資料, 2001)

(注7) この『北鎮小学校校友雑誌』は上原師団長の遺品の中から出てきたスクラップに含まれていたが、それには「発行年月日」が記載されていない。孫娘の島野氏は、「祖父が亡くなった昭和8年ではないか」と推測している。

(注8) クラッツァーについては、多くの先行研究で触れているが、勤務会社の名前について山崎は「フレモンス商会」、大野は「シーメンス・シュケット商社」、坂部は「横浜ボーレル商会」、中野は1959年の帰国前に、本人に会って直接聞いたとして「レッツエルホラー社」と記している。筆者は、白川義員が1966年にインスブルックで本人に直接聞いた「日本スキーの父クラッツァーさん」(太陽, 第41号, 平凡社, 1966, pp.33-34)にあるインタビューした記事が最新のものであり最も信頼できると考え、それを採用した。

- 1) 間宮林蔵, 北蝦夷図説 (1855)
- 2) 杉村孝雄, 露国式カンジキ, 樺太・遠景と近景, 1995, p.171
- 3) 六鹿一彦, ストーについて, 山とスキー, 第57号, 1926, p.1
- 4) 氏家等, 北東アジアにおけるカンジキの発生と伝播 (北の歴史・文化交流研究事業研究報告, 北海道開拓記念館, 1995, p.358)
- 5) 「スキ」馳け (少国民, 第8年8号, 學齡館, 1896, pp.62-63).
- 6) 伊黒正次, スキー発祥の地・北歐三国 (世界のスキー, 実業之日本社, 1970, pp.16-29)
- 7) 亀岡泰辰, サイ, (偕行社記事, 第307号, 1903, pp.122-125)
- 8) 小川玄一, 歴史として (記念創立拾五年, 北海道帝国大学文武会スキー部, 1926, p.272)
- 9) 小川玄一, 吹き寄せ, 1988
- 10) 中野理, スキーの誕生, 金剛出版, 1964, p.98
- 11) 大野精七, スキーの渡来 (北海道のスキーと共に, 1971, pp.7-11)
- 12) 瓜生卓造, 高田以前のスキー (スキー, Vol.73-1, 1972, pp.124-125)
- 13) 吉井修七, 丘陵スキー術, 目黒書店, 1930, p.5
- 14) 山崎紫峰, スキーの渡来 (日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, p.22)
- 15) 小川勝次, スキーの渡来史 (日本スキー発達史, 朋文堂, 1956, p.32)
- 16) 坂部護郎, スキー発達略史 (はるかなるシュプール, スキージャーナル, 1976, pp.179-180)
- 17) 中野理, スキー渡来 (スキーの誕生, 金剛出版, 1964, p.99)
- 18) 松下高信, 日本近代スキーの黎明期におけるノルウェースキーについて (日本体育学会第39回大会号, 1988)
- 19) 亀岡泰辰, サイ, (偕行社記事, 第307号, 1903, p.122)
- 20) 大野精七, スキーの渡来 (北海道のスキーと共に, 1971, p.7)
- 21) 瓜生卓造, 高田以前のスキー (スキー, Vol.73-1, 1972, p.125)
- 22) 福岡孝行, スキー誕生と文明開化 (スキー発達史, 実業之日本社, 1971, p.109)
- 23) 山崎紫峰, スキーの渡来 (日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, p.23)

- 24) 山崎紫峰, スキーの渡来 (日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, 年表)
- 25) 赤阪富弘, 北大スキー部五十年の歩み (北海タイムス, 昭和 37 年 11 月 22 日~12 月 31 日)
- 26) 北大スキー部七十年の歩み, (北海道大学七十年史, 1982, pp.10-11)
- 27) 中野誠一, コラー先生を憶う (山とスキー, 第 47 号, 1925, p.13)
- 28) 山根甚信, 若き日のハンス・コラー (北大季刊, 第 15 号, 1958, p.104)
- 29) 中浦皓至, 日本スキー・もうひとつの源流, 北海道大学図書刊行会, 1999, p. 5
- 30) 稲田昌植, スキー部創立当時の回顧 (記念創立拾五年, 北海道帝国大学文武会スキー部, 1926, p.266)
- 31) 中野理, スキー渡来 (日本スキーの誕生, 金剛出版, 1964, p.102)
- 32) 小樽新聞, 旭川では五年前からスキー, 明治 45 年 3 月 2 日付
- 33) 北海タイムス, 旭川とスキー, 明治 45 年 3 月 1 日付
- 34) 札幌毎日新聞, スキーの研究, 明治 45 年 3 月 1 日付
- 35) 長岡外史, 我邦最初のスキー, イデア書院, 1929, p.1/長岡外史顕彰会, 航空とスキーの先駆 人間長岡外史, 1916/長岡外史関係文書 回顧録篇, 長岡外史文書研究会, 吉川弘文館, 1989/長岡外史関係文書書簡書類篇, 長岡外史文書研究会, 吉川弘文館, 1989
- 36) 第十三師団スキー研究委員, 日本に於ける「スキー」の経過 (スキー, 第 1 号, 1912, p.45)
- 37) 山崎紫峰, スキーの渡来 (日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, p.16)
- 38) 松下高信, 日本における近代スキー導入のきっかけについて (日本体育学会第 42 回大会号, 1991, p.114)
- 39) 木下秀明, 高田師団によるスキー民間解放に関する再検討 (スポーツ史研究, 第 4 号, 1992, p.19)
- 40) 福岡孝行, スキー誕生と文明開化 (スキー発達史, 実業之日本社, 1971, p.112)
- 41) 荒巻廣政, 秋田県地方 (スキー年鑑, 第 9 号, 全日本スキー連盟, p.172)
- 42) 長岡忠一, 日本近代スキーの発祥と展開, メディア K コスモ, 1974, p.32
- 43) 長岡忠一, スキーの渡来 (日本スキー事始め, 1989, p.25),
- 44) S・ズナメンスキー・秋月俊幸訳, ロシア人の日本発見, 北大図書刊行会, 1986, p.47
- 45) 渡辺惇, 中山ヒュッテ物語, 1993, p.13
- 46) 山崎紫峰, スキーの渡来 (日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, p.24)
- 47) 中野誠一, コラー先生を憶ふ (山とスキー, 第 47 号, 1924, pp.13-15)
- 48) 瓜生卓造, スキー風土記, 日貿出版社, 1978, p.34
- 49) 中浦皓至, 日本スキー・もうひとつの源流, 北海道大学図書刊行会, 1999, p.22
- 50) 荒巻廣政, 秋田県地方 (スキー年鑑, 第 9 号, 全日本スキー連盟, 1933, p.173)
- 51) 山口龍輔, 感激の追憶 (スキー年鑑 第 9 号, 全日本スキー連盟, 1933, p.133)
- 52) 中野浩一, スキー黎明期における永井道明によるスキー普及活動について (体育学研究 41 号, 1997, pp. 318-327)
- 53) 三瓶勝美, 本道初期のスキー (小樽新聞, 昭和 3 年 2 月 22 日付)
- 54) 瓜生卓造, スキー三国志, スキージャーナル社, 1970, p.30
- 55) 山崎紫峰, 日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, p.260-261
- 56) 中浦皓至, 日本スキー・もうひとつの源流, 北海道大学図書刊行会, 1999, p.50
- 57) 大内六郎, スキー術及び蝦夷登山に就いて (校友会雑誌, 第 6 号, 上川中学校, 1912, p. 1)
- 58) 白井長助, スキー史学入門 I (山と溪谷, 第 60 号, 山と溪谷社, 1940, p. 1)
- 59) 瓜生卓造, 発掘日本スキー用具発達史 4 (スキー, 第 73 巻第 4 号, 実業之日本社, 1972, p.161)
- 60) 佐藤徹雄, 北海道のスキーづくり, 市立名寄図書館, 1983, p.51

- 61) 第十三師団スキー研究委員, 日本に於ける「スキー」の経過(スキー, 第1号, 日本スキー倶楽部, 1912, p.45)
- 62) 鶴見宜信「日本に於ける当初のスキー」『スキー年鑑』第5号, 全日本スキー連盟, 1931, p.60)
- 63) 長岡外史, 我邦最初のスキー, イデア書院, 1929, p.61
- 64) 第十三師団スキー研究委員, 日本に於ける「スキー」の経過(スキー, 第1号, 日本スキー倶楽部, 1912, p.46)
- 65) 山形新聞, スキー元年もう一つの歴史, 平成11年1月19日付

〈写真及び図の出典〉

- 図1 樺太原住民のストー; 間宮林蔵, 北蝦夷図説(山崎紫峰『日本スキー発達史』)
- 図2 『少國民』の「スキ」馳け; (少國民, 第8年8号, 學齡館, 1896, pp.62)
- 図3 『偕行社』の「サイ」; 亀岡泰辰, サイ, (偕行社記事, 第307号, 1903, p.125)
- 図4 デルメラトクリッフ; 山崎紫峰『日本スキー発達史』
- 図5 来日当時のハンスコラー; 『札幌同窓会第47回報告』1925
- 図6 上原勇作第七師団長; 島野仲子氏所蔵
- 図7 諾威公使杉村虎一氏より陸軍省への書簡; 防衛研究所図書館所蔵
- 図8 北大生で最初のスキーヤー山根甚信; 山根乙彦氏所蔵
- 図9 北海道スキーの父・三瓶勝美; 中川次郎氏所蔵
- 図10 スキーの練習をする永井道明; 北大図書館所蔵の「時事新報」明治44年1月22日付
- 図11 橇, 荷車其他製造元 森田亀次郎; 『上川便覧』明治35年7月18日